

Ⅱ “教育山形「さんさん」プラン”の各施策について

**少人数学級編制
個に応じたきめ細かな対応による児童の学びと心の充実
三川町立横山小学校**

1 本校の実態

全校児童 160 名、普通学級が 6 学級、特別支援学級が 4 学級、計 10 学級である。そのうち現 4 学年は 36 名で、小学 1 年時は国の基準により 2 学級、2 年時はさんさんプランによる加配で 2 学級、令和元年度の 3 年時から 37 名の 1 学級になったが、県の加配により少人数指導教員（非常勤講師）1 名が配属された。

学級の中には特別な支援を要する児童が複数名いることや学習指導や生徒指導で指導を要する児童も多いこと、また、転出入や転籍などもあり、低学年の頃から安定しない面も多かった。

2 実践

(1) 運用の方針

令和元年度は第 3 学年の学級に、令和 2 年度は第 4 学年の学級に少人数指導教員を配置し、以下 3 点に力を入れた。

- ① 学習指導では、学習規律と学力向上をめざし、T T 指導による個に応じた指導や支援を行うこと
- ② 生徒指導では、特別な支援を要する児童への支援や児童の心に寄り添ったきめ細かな対応による個の安定と集団の意欲高揚を図ること
- ③ 担任が児童と向き合う時間を確保するために担任の事務的負担を軽減すること

(2) 具体的な取組み事例

- ① 宿題点検による、確実な提出とコメントによる学習意欲の向上

学級の人数が多いが、細部まで宿題を点検することで、全員が確実に提出するようになり、一つ一つ丁寧に宿題に取り組む習慣が形成された。また、毎日、全員の自主勉強ノートに励ましのコメントやアドバイスを書き、子どもの学習意欲と学力の向上にもつながっていた。

- ② 低位の児童への支援

授業では特に低位の児童を担当し、指導している。児童に寄り添いながら指導していることで、自信を持って挙手をしたり、みんなの前で発表したりするようになり、少しずつ学力の向上も見られるようになってきた。

- ③ 特別な配慮を要する児童への対応

学級全体で一緒に行動できなくなった時に、その児童と一緒に過ごしたり、別室で指導をしたりすることが可能になるので、他の児童の活動に影響を及ぼすことなく、個別の対応をすることができた。（令和元年度）

- ④ 教室環境の充実

いつも同じ少人数指導教員が教室にいるため、教科担当の授業で担当教員が

変わっても、児童が安心して授業に臨むことができた。休み時間も、担任か少人数指導教員のどちらかが教室にいることができるため、児童の安心・安全につながった。その他、学習・生活上のいろいろなところで担任と情報を共有しながら児童を支えていたので、児童全員がとても安心・安全に過ごすことができた。

⑤ 担任が児童と向き合う時間の確保

- ・宿題点検や宿題印刷、アンケート結果集計等の事務的な処理を少人数学級指導教員に業務を分担したので、在校中に担任が児童と向き合う時間も増えた。連携・協働して児童と関わる時間の充実につながった。
- ・コロナウイルス感染予防対策のための消毒作業を行った。消毒作業を任せることができ、担任は児童の給食指導に向かうことができた。放課後に時間があるときは、消毒作業も行った。(令和2年度)

3 成果と課題

- ・児童が2年生から3年生になるとき、2学級から1学級になり、人数が倍に増えたが、担任はもちろん少人数指導教員を配置したことで、児童が安心してコミュニケーションを図ることができる環境ができた。



- ・学力においては、初見の文章を読む活動を取り入れるとともに、協働的な学習をたくさん行った。その中で子ども同士が関わる際、担任と少人数指導教員が連携して適切な支援を入れることができ、学力向上につながった。その結果として、国語のNRTやCRTの偏差値が高くなった。
- ・算数においては、低位の児童が安心してともに学ぶ姿がつけられている。Q-Uの結果では学校生活意欲総合点の分布を見ても学習関係で全国平均より1.5ポイント以上高い結果となっていた。
- ・生徒指導においては、個々の児童が、学級の中に自分の居場所があり、絆づくりができた。仲よしになるためのアンケート(いじめ)の調査では、年間23件(2年時)、11件(3年時)、8件(4年時)に減少している。また、Q-Uの結果では、学級満足度尺度では、3年時の5月の結果では学級生活不満足群に4名、侵害行為認知群1名、非承認群に6名と分布していたが、4年時の10月の結果では学級生活不満足群に0名、侵害行為認知群0名、非承認群に3名となり、ほとんどが学級生活満足群に属している。また、学校生活意欲総合点の分布を見ても、友だち関係で全国平均より1.5ポイント以上高い結果となっている。

上記の点から見ても、少人数指導教員の配置は、学校の教育力をパワーアップさせるために大変ありがたく、有効な加配といえる。今年度、学びが主体的・協働的にできたこと、学級集団で自己有用感が育成されたことは、認め合い高め合う学校づくりにつながったと考える。是非、来年度以降も継続して配置していただきたい。

少人数学級編制
40人学級で目指す「探究的な学び」
舟形町立舟形中学校

1 本校の実態

本校は、今年度は、全校生徒 130 名、学級数 6 学級（うち 2 学級は特別支援）、1 学年及び 2 学年が 40 人学級となった。この状況を受けて、さんさんプランにおける多人数単学級となり、非常勤講師 2 名が配置された。

春の緊急事態宣言により、5 月末から通常の学校生活を行う状況下、小学校 6 年間 2 つの学級で学んできた 1 学年は、児童が転出したことで、中学校で初めて 40 人学級となった。本来であれば、入学当初に行われる集団づくりや春季大運動会、部活動への参加を経て中学生らしさを身につける時期だが、分散登校や午前中だけの教育課程に、ぼんやりとしたスタートになってしまった。また、40 人学級用の教室をと、特別教室を広げ増築してもらったが、今回のコロナウイルス感染予防対策の為「教室における密を防ぐ」という指導に、隙間なく並んだ机の列を目の前に、どうすればいいのかと頭を抱える状況でスタートした令和 2 年度となった。

2 実践

(1) 運用の方針

- ① 40 人学級の授業では、できる限り T T 指導を行い、必要な生徒に必要な支援を行う。
- ② 単元（学習内容）によって、必要に応じ、学級の人数を半減させ、生徒一人ひとりの進捗や理解度に合わせた指導を実践する。
- ③ 学校経営の基本を「授業づくり」におき、生徒や教職員の学び合いを推進する。

(2) 具体的な取組み事例

① T T 指導による学び方の定着

昨年度までコの字型で授業を行っていたが、コロナウイルス感染防止から、講義型（全員が黒板に向かって座る）に戻した。しかし、40 人学級で、教師が黒板の前に立つと、後部 7 席目の生徒の机上は全く見えない状況に、生徒が学びからこぼれ落ちてしまうと懸念する声が職員間でも交わされるようになった。しかし、感染対策を講じながら 4 人グループにすることで、教室内に空間が生まれ、生徒との距離が縮まり、個々に何を考えているかも把握しやすくなった。

本校では、1 学年と 2 学年の全教科、3 学年の英語と数学は、T T 指導を行っている。仲間とともに学ぶ、仲間を頼るスタイルを定着させたいという思いから、T 2 で入っている教員は、学び方を支援するという意識で授業に出ている。複数で授業を担当することによって、授業自体が開かれ、教材や指導の工夫が見られるようになってきている。

② 少人数指導による学習内容の定着

1 学年の英語の授業では、単元（教材）によって、習熟を意識し、40 人学級を 2 組に分けた授業を取り入れている。例えば、授業時間の前半、一方のグループが、単元の学習事項に関するコミュニケーション活動を行い、もう一方のグループは、隣室で同単元の単語や語順を身につけるための学習を行う。後半は、その逆となる。人数を半減することで、一人ひとりに目が行き届き、つまずきへの対応が迅速にできるとともに、生徒同士のコミュニケーション機会を増やすこ

とが実現できている。また、それぞれの活動時間を短く区切ることで、集中して学習に取り組めるようになってきている。

③ 生徒の学びを検証する事後研修会の積み重ねによる授業改善

本校では、事後研修会に、数名の生徒を参加させ、生徒から見た「授業の学び」を生徒自身が語る場を設けている。

《3年数学の事後研修会より》

生徒（以下S）：（授業の）はじめは、すごく簡単だと思ったけれど、考えれば考えるほど、難しいと思えてきました。難しい問題でした。

参加者（以下T）：同じグループでM子がA子に、考え方を説明しているとき、あなたはどんなことを考えていた？

S：ん～、説明しているな、と思ったのですが。僕も補足しようと思ったのですが。・・・今日は、欲がでました。

T：欲って？

S：一緒に考えてもよかったけど、今日は、僕も夢中でした。途中で止められなかった。僕的には、人には自分が完璧になってから、伝えたいと思っています。自分が悩んでいる状況では、まだまだだと思っています。

T：あなたは、こういった学習のメリットをどう感じていますか。

S：周りに、気軽に聞くことができる、と同時に一人で集中することもできます。でも、自分がちゃんと理解してからでないと、説明はできないなあ。



以上の生徒の言葉から、教師はグループに入って、安易に「（他の人に）教えてあげて」と言うのではなく、生徒にもタイミングがあることに気付かされる。生徒が、授業をどう感じているかを知ることの積み重ねが、「探究的な学び」のある授業づくりにつながっている。

3 成果と課題

(1) 工夫された学習スタイル

TT指導やクラスを二つに分けた授業の実践を通し、既存の授業スタイルにとらわれずに工夫したり、改善したりする試みが見られた。習熟の場を効果的に取り入れることができた。

また、年間を通して行ってきた授業研究会と、生徒が参加しての事後研修会を通し、より「生徒の学び」に軸をおいた授業づくりを意識できるようになってきている。



(2) 限られた時間の活用

6時間勤務の非常勤講師（2名）の配置は、時間割編成にも制約があり、学校行事や諸会議等、様々な配慮が必要であった。中でも、校内研修会は、学校で目指す授業を、全職員で一体となって共有する大切な場として、学ぶ場や時間を十分に確保できるよう設定したい。

(3) 教科担任としての専門性を生かす

中学校では、教科担任制であるが、非常勤講師の配置が必ずしも教科を選択できる状況にはなっていない。学校として強化したい教科について対応できるような配置が望まれる。また、今年度は、1、2学年が多人数単学級で加配措置が2名であったが、来年度は2、3学年が多人数単学級となるのに対して、制度上1名の配置となる。学校の置かれている状況に応じ、柔軟に対応できるような制度設計を期待したい。

**特別支援学級 学級編制基準の引き下げ
生活に使える力の定着をめざした教科指導の充実
山形市立第三小学校**

1 本校の実態

本校の特別支援学級在籍児童は、知的障がい特別支援学級在籍が7名（2年生2名、3年生1名、4年生1名、5年生2名、6年生1名）、自閉症・情緒障がい特別支援学級在籍が8名（1年生1名、3年生1名、4年生2名、5年生4名）の計15名である。どちらの学級も8名以下なので、本来であれば1学級ずつになるが、県のさんさんプランによる特別支援学級編制基準の引き下げにより、どちらも2学級編制となっている。知的障がい特別支援学級は2・3年生3名、4～6年生4名の2クラスに分けている。自閉症・情緒障がい特別支援学級は1～4年生4名、5年生4名の2クラスに分けて学習を進めている。

少人数になることでより実態に即した指導が可能となり、生活に使える力を着実に定着できると考えた。

2 実践

(1) 運用の方針

- ① 一人ひとりの実態に応じた課題設定と支援、見取りと評価を一体的に行えるようにする。
- ② 知的障がい特別支援学級と自閉症・情緒障がい特別支援学級の学びを交流することで、見方・考え方を広げていく。

(2) 具体的な取組み事例

- ① お金の学習（知的障がい特別支援学級：4～6年生4名）

【実態】

A児	6種類の硬貨を弁別できる。 1円玉が○枚で○円、10円玉が○枚で○十円ということは分かる。
B児	1種類の硬貨を使って品物の代金ちょうどの金額を出すことができる。
C児	
D児	

【ねらい】

A児	品物の代金ちょうどの金額を出すことができる。
B児	5円・50円・500円玉も使って品物の代金ちょうどの金額を出すことができる。 切り上げの考え方で、おつりをもらえるお金を出すことができる。
C児	
D児	



まずは、お菓子の空き箱に値段シールを貼ったものを用意し、ちょうどの金額を出せるように実際のお金を使って練習した。

A児には位取り表を用意し、位取り表に自分で数字を書いて、その枚数だけ硬貨を並べるように支援した。

B・C・D児には、数を「5といくつ」に分解して5円・50円・500円と、あといくら出せばよいかを考えるように言葉がけした。

一人ひとりの実態とつきたい力に応じて支援したことにより、4人ともねらいを達成することができるようになった。

次に、実際にスーパーで買い物をした。事前に、家の人に何を買ってきて欲しいかを聞き取り、生活の時間に近くのスーパーに買い物に出かけた。

A児は、授業で使った位取り表をスーパーに持って行き、スーパー内でもそれを活用し、自分で正しい金額のお金を並べることができた。

B・C・D児は、自分で数を「5といくつ」に分解して5円・50円・500玉を入れながら、ちょうどの金額を取り出して支払うことができ、身につけた知

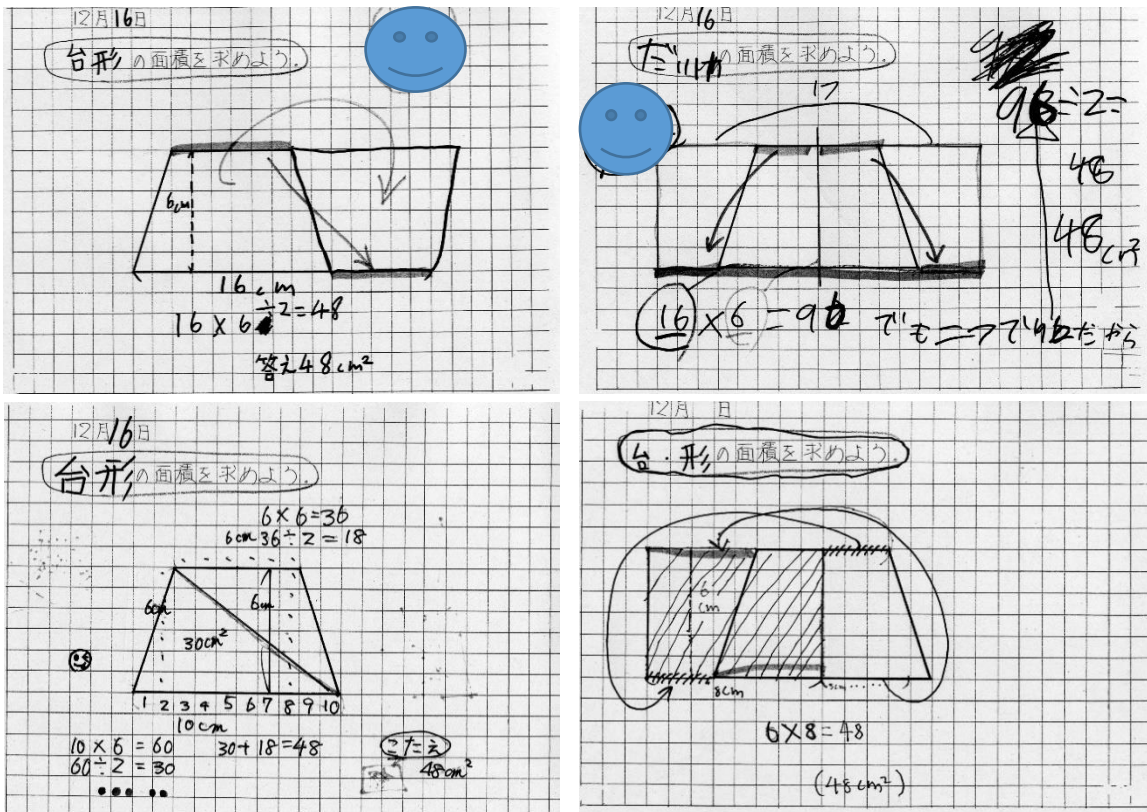
識・技能を、生活に使える力とすることができた。

② 四角形や三角形の面積

(知的障がい特別支援学級、自閉症・情緒障がい特別支援学級の合同授業)

5年生の面積の学習のねらいとともに、知的障がい特別支援学級の5年生2名には、いろいろな考え方ができるようにというねらいを、自閉症・情緒障がい特別支援学級の5年生4名には、望ましい学習態度を真似できるようにというねらいを設定し、5年生6名の合同学習を行った。

平行四辺形や三角形の面積を求める学習を通して、等積変形や倍積変形について理解した上で、台形を求める学習を行った。授業の後半に、お互いの考えを发表或し聞いたりする時間を設けたことで、「友達と違う求め方を考えよう。」と意欲的に学習に取り組む姿が見られた。



3 成果と課題

(1) 成果

実生活と結び付けた課題の設定により、どの児童も主体的に学習に取り組むことができるようになった。課題解決の場面では、1学級の人数が少ない分、一人ひとりに応じたより細やかな支援をすることができる。特別支援学級に在籍する児童の個人差も大きくなっていることから、特別支援学級の学級編制基準の引き下げにより、個別の実態に応じた支援や学習の準備にあたることができたことは大変ありがたい。また、教員の数が増えたことにより、ねらいに応じて様々な学習グループを編制し、学習の定着を図ることができた。

(2) 今後の課題

在籍児童の少人数化で、より細やかな支援ができるようになったため、一人ひとりの実態に応じたねらいを明確にし、指導にあたっている。今後、より教科でつきたい力に迫るため、学習形態や学習方法等を工夫し、教科で身につけた力が生活に使える力となるように支援していきたい。

小学校低学年副担任制
一人ひとりに対応し、個の力を伸ばす指導の在り方
庄内町立余目第二小学校

1 本校の実態

本校は、余目駅から約 900m で、商業地域近くに位置している。18 の地区から児童が通学しており、遠距離の 4 地区は通年バス通学をし、6 地区の児童は冬期間バス通学をしている。「夢をもち、未来を拓く子どもの育成」を学校目標とし、学校・家庭・地域が子どもを中心とした同心円で共に歩む学校づくりに取り組んでいる。

学校規模は、全校児童 208 名、特別支援学級 3 学級を含む全 10 学級である。児童数の減少により、多人数単学級が多く、第 1 学年（36 名）と第 2 学年（34 名）で副担任として非常勤講師が配置されている。

児童の実態として、明るく素直で、真面目に取り組む良さがある反面、主体性やチャレンジ精神をさらに伸ばす必要性を感じている。また、学力面では、個別に支援を要する児童や個人差への対応が課題である。

2 実践

(1) 運用の方針

- ① 副担任として学級に入り、学習指導・生徒指導を行うことで、一人ひとりに学校生活における満足感や達成感を与える。
- ② 担任複数制とすることで、よりきめ細かな指導を行い、児童一人ひとりが安心して学校生活を送れるようにする。

(2) 具体的な取り組み事例

- ① 学習中の支援と役割分担の工夫
 - ・基本的に担任が T1 で授業を進め、つまづいている児童を中心に副担任がヒントを与えたり支援したりした。
 - ・発表の場面では、担任が授業を進めつつ、副担任が発表の仕方についてさりげなく支援し、ふさわしい言葉を使用できるよう指導できた。
 - ・プリントでの練習や作業の場合は、学級を 2 組に分けて支援やチェックを行っているため、個々に十分目配りしたり、直しを徹底したりできた。
 - ・点検業務を主に副担任が行うことで、担任が教材準備をこれまで以上に充実させることができた。
 - ・授業の前に簡単な打ち合わせを行い、学習内容に応じてどの場面でどのようにサポートするか確認しながら進めるようにした。
 - ・特別な配慮を要する児童について、他の児童と同じ活動が困難な場合には、副担任が支援を行い、その子に合った対応をするよう最大限努めることができた。



- ② 効果的な宿題やプリント、点検カード等の見取り
- ・登校後から朝活動の時間に、副担任が検温カードや提出物、連絡帳の点検を行っている。担任は、子ども達の様子をよく見て声をかけたり、朝学習や朝読書の活動に専念したりでき、朝の活動を充実させることができた。また、早い時間にカード類や提出物のチェックが済むため、個々への対応も早くできるようになった。
 - ・宿題についても、副担任が点検を行い、十分出来ていないところについて担任がその日のうちに対応することができた。即日、返却が可能になり、子ども達の意欲向上にもつながった。
- ③ 子どもとのかかわりの充実
- ・休み時間も複数の目で児童の様子を見ることができ、ちょっとしたトラブルにも機を逃さず対応することができ、子ども達の安定につながった。特に、1年生は、スムーズに学校生活になじむことができた。
 - ・担任業務を分担して行うことができるため、担任も副担任も児童の話に耳を傾ける時間ができた。一人ひとりの様子をよく観察し、児童理解に努めている。お互いが情報交換し、それを元に、家庭とのコミュニケーションもこまめにとることができた。
 - ・健康診断や教育相談週間の個別面談の時間も、授業や活動を進めながら実施することができ、これまで以上に指導の充実が図られた。
 - ・感染予防のための消毒や手洗いの見届けを副担任が行うことで、担任が給食指導や児童への対応に集中できるようになった。
 - ・徒歩で帰る児童とスクールバスの児童の担当を分担して行うことができた。

3 成果と課題

(1) 複数体制での指導について

- ・多人数学級でも2人体制で指導することで、学習・生活両面にわたってきめ細かな指導を行うことができた。1年生は、スムーズに小学校生活がスタートでき、安心して生活することができた。
- ・学級担任が2人いることで、子ども達との対話が増え、子ども達が学校生活を安心・安定して送ることができた。
- ・特別な配慮を要する児童への学習支援を行うことができ、他の児童も安定して生活することができた。
- ・すぐに打ち合わせがしやすいように、職員室でも隣の席にしているが、副担任の勤務時間が限られているため、情報交換や打ち合わせの時間を十分にとれないことがあり、課題と感じた。



(2) 分担について

TTとしての支援以外にも、ノートやプリント類の点検、下校指導や給食準備等多方面にわたって副担任が積極的に関わり、子ども達への指導を充実させることができ、担任の負担軽減にもつながった。

教育マイスター制度 小学校教育マイスター
校内研究の推進に向けて連携する教師集団の育成をめざして
鮭川村立鮭川小学校

1 本校の実態

本校は、全校児童 170 名、9 学級（各学年 1 学級、知的・情緒・肢体不自由）で、今年度、統合より創立 10 周年を迎えた学校である。それまでは、村内に 4 つ（鮭川・大豊・曲川・牛潜）の小学校があったが、児童数の減少に伴い、新生鮭川小学校としての歩みを始めた。村内に 1 小 1 中学校であることから、中学校と同じ校内研究のテーマを設定して、小中一貫教育に力を入れている。

外部講師の支援を受けながら、学校・学級カリキュラム・マネジメントを作成・活用して教育目標の達成に努めている。校内研究教科（算数）の重点単元を設定するとともに、育成する資質・能力を総合的な学習の時間と生活科と往還させることを目的としたカリキュラム・マネジメントを行っているが、1 学年 1 学級のため、個々の取組みをどう学校全体に広げるかが課題の一つである。そこで、校内研究をはじめとした種々の取組みを推進するために、教育マイスターを活用してきた。

2 実践

(1) 運用の方針

各教員が授業力を向上させるには、日々の実践の充実が必須であり、それが児童の変容につながっていくとの認識のもと、特に次の点に力をいれてきた。

- ① 教育マイスターが学習指導部長を兼務し、校内研究を含めた「まなび」全体を把握する。
- ② 校内研究の教科（算数）を中心に授業参観や T T 指導を行い、日常の実践を充実させる。
- ③ 授業づくりについて情報交換し、授業力を高め合う。
- ④ マイスターの研修報告により実践的な情報提供を行い、個々の授業力向上につなげる。

(2) 具体的な取組み事例

① 「まなび」づくりの推進

毎月の職員会議に向けて部会（チームミーティング）を行い、計画の進捗状況を把握している。チーフがマイスター教員で、研究主任も学習指導部に属しているため、情報共有を図りやすく、月毎の取組みの中に研究推進に向けた内容も取り入れやすかった。授業研究会を通じての成果や反省も「まなび」づくりの一環として積み上げることができた。また、学び合いの充実と高め合う場面づくりに重点を置いた授業の基本スタイルを「鮭小スタンダード」として確立することや、重点単元の取組みなども共通理解を図りながら進め、担任団の足並みをそろえることができた。

② 授業参観を日常的に推進するための工夫

教育マイスターが授業に入ることを想定した時間割を作成し、各担任もマイスターも時間調整を毎回しなくてもよいタイムスケジュールを組んでおくことにした。それを基本としながら、授業進度や行事等と調整して授業参観を行う。この方法により、マイスター教員も担任も見通しをもって臨むことができた。職員全体に、2～3 週ごとに変更点を記載し

	月	火	水	木	金
月日	7月6日	7月7日	7月8日	7月9日	7月10日
予定など	校内研修	(研修訓練) スマイル教室	クラブ活動	教育委員会管理 結核	授業参観日
2時間目			4年	1年	2年
3時間目	6年	5年			
4時間目					
備考					

	月	火	水	木	金
月日	7月13日	7月14日	7月15日	7月16日	7月17日
予定など	研修会(研修) 鮭小10周年記念	全校集会 6,7年 新10周年記念		授業参観学習 スマイル教室	授業参観学習
2時間目			4年	1年	2年
3時間目	6年	5年			
4時間目					
備考					

た計画を提示した。その計画表に合わせて管理職や教務が授業参観をしたり、初任者研修を行ったりして日常的に研究を意識することができた。

日々の指導の充実を図るといふねらいから、授業参観の時間に合わせて授業進度を調整することも行わないようにした。その日が習熟の時間であれば、マイスター教員はTTとして担任の支援を行った。

③ 授業づくりについての情報の蓄積

マイスター通信を発行し、授業参観・TT指導を通して気付いたことを伝え、情報の共有化を図った。思考スキルや思考ツールの使い方が具体的に分かり、自分もやってみよう、自分の学年ならこうすればできそうだったといった個々の実践意欲の向上につながった。

また、研究の視点や内容に合わせた記載は、授業の構成を考える上で大変有効であった。担任団が、視点ごとの悩みを解決するためのヒントを得ることができて研究推進につながった。

授業参観終了後は、短時間でも授業者と話し合う場を設けるようにした。本時は研究のどの視点に力を入れたのか、日頃の悩みや困っていることはないかなど、OJTを充実させることにもつながった。授業直後に話ができない場合には当日中に行うようにして、授業参観の成果が次の日につながるよう配慮した。

④ 研修報告での情報伝達


マイスターが校外で行った研修について、職員会議の資料として研修報告を載せ、定期的な情報提供が行われた。地域での先進的な取組みや新学習指導要領の推進の方法などに触れることで、刺激を受けたり自己の授業を見直す機会となったりした。

算数の授業作りのために・・・学ばせていただいたこと②

いつも授業参観・TT指導へのご協力ありがとうございます。各学年の授業におじゃまして、学ばせていただいたことを紹介していきます。ご一読、よろしくお願ひします。

①板書・掲示構成の工夫


・前時のひし形の公式をもとに、本時のたこ形の公式作りを行う授業でした。前時での学習を想起しながら考察できるように、ホワイトボードに前時での児童の学習プリントを提示していました。児童は、これらをもとに自分の考えを持ち、たくさんの考えを類型化したりできていました。本時での学習内容は、黒板に記録していきます。有効な活用の仕方だと感じました。(5年)



②思考を深めるための工夫

・児童はひし算の考え方をさくらんぼの図に表すほかに、言葉でも説明できるような思考の流れにそった穴あきの学習プリントを活用していました。グループで話し合いながら書き進めることができていました。(1年)

・葉っぱつきのさくらんぼの図を使って、図に数字を書き込みながら考えを深める様子が見られました。児童の思考の流れに合わせて、「100が〇こていくつ」や「〇は100がいくつ」を考えるための思考ツールとして有効だと感じました。(2年)



など、学ばせていただき、自分の授業に生かしていきたいと感じた点です。(まだまだたくさんありますが...)なお、上述について、授業をしていただいた先生より、付け足しや訂正があればご意見をお待ちしております。今月も参観やTT指導でおじゃまさせていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。

< 研究の視点 >

- 視点1**：ねらいを明確にした
必要感のある課題の提示
- 視点2**：考えが広がる授業展開
- 視点3**：学びが実感できる
ふり返りの場の設定

3 成果と課題

(1) 成果

- ・マイスターによる授業参観が日常の研究意識を高める動機付けとなり、視点に合わせた授業改善に継続して取り組めた。授業研究会が充実するとともに、学習指導全般とのつながりが深められ、年間を通して校内研究を推進することができた。
- ・マイスターからの情報提供により、一人ひとりの取組みが広がり、幅広い取組みとなった。マイスター通信を通して、日常会話の中で授業の話が飛び交い、教員同士のコミュニケーションも活発になった。

(2) 課題と今後の方向性

- ・マイスターと授業者が情報交換をする時間の確保が難しかった。直接話す時間が取れなくてもマイスターのアドバイスや感想が伝わる「記録シート」を用意して情報共有の仕組みを整えて、実践や成果を積み上げていきたい。
- ・諸行事等で授業参観の予定が変更になる場合が多かった。多忙が予想される時期は予め計画からはずしたり、重点単元のときに回数を増やしたりするなど、柔軟な対応を探りながら、実践を進めていきたい。

教育マイスター制度 小学校教育マイスター 教師の「授業力の向上」をめざして

飯豊町立第一小学校

1 本校の実態

本校は飯豊の美しい散居集落の中にあり、平成 28 年 10 月に待望の新校舎が竣工した。今年度は創立 50 周年という記念すべき年を迎え、全校児童数 168 名（各学年 1 学級に特別支援 2 学級）がその素晴らしい環境の中で伸び伸びと学校生活を送っている。県学力等調査の結果は、国・算ともに知識や技能を問う問題はおおむね良好であるが、それらを活用する問題や、特に算数での探究型思考を問う問題の正答率に課題があった。このような実態を受けて、今年度から学校研究で算数科における「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善に取り組み、日々実践を重ねている。若手教員の多い職員構成であることから、担任同士が日常的に授業改善について話し合う機会を大切にした取組みを全職員で進めているところである。



2 実践

(1) 運用の方針

- ① O J T 推進により職員全体の授業力・担任力の向上
- ② 探究型学習の視点を活かした授業改善の推進と学校研究の充実
上記①、②の取組みによる児童の学力の向上

(2) 具体的な取組み事例

① 若手教員への授業づくりのアドバイス

教育マイスターが若手教員へアドバイスをしながらともに授業づくりを行う機会をもった。また、教育マイスター自身の授業を若手教員に見てもらい、実践後に成果と課題についてさらに話をすることで、互いの授業実践にもつなげていけるようにした。その取組みを継続することで、若手教員が自分の授業について課題意識をもち、積極的に質問する姿が見られるようになり、主体的に授業改善に取り組めるようになってきた。

② ベテラン教員による O J T



算数科以外でも、ベテラン教員が各自の得意とする教科等の授業を公開し、若手がそれを参観する仕組みを作ることによって校内 O J T の推進を図った。ベテラン教員には事前に「何の教科のどの単元」を「何月頃」に公開できるかアンケートを取り調整した。略案などもなしで、45 分全部見なくてもよいこととして、負担を軽減した。参観者は授業参観で得た気づきや、さらに聞きたいことなどをカードに記載し授業者に戻すこととし、互いに授業づくりについて学べるようにした。

③ 日々の授業実践の共有化

事前に教育マイスターが授業を参観することを伝え、参観で見つけたその授業のよさ、ポイントや技をマイスター通信「めざせ！探究型の授業づくり！」としてまとめ、全職員に配付し、職員室内に掲示した。「マイスター通信」を読んでもらうことで、教員一人ひとりの良い実践を共有することを目指した。

教育マイスター制度 中学校教育マイスター
探究型学習等を通じた共に学び合い共に高め合う生徒の育成
村山市立葉山中学校

1 本校の実態

本校の学区は村山市の西部、最上川の西側、霊峰葉山の麓にあたり、大久保・富本・戸沢・富並の4つの小学校から集まってきている。生徒数177名で各学年2クラスと特別支援学級2クラスの計8クラスである。創立以来、全国でも数少ない教科教室型の授業形態をとっており、全ての教科の学習を、独自の教室に移動して行っている。各階の教室前には学習センターがあり、放送設備、インタラクティブ機能搭載プロジェクター、大型TVやPC等が配置されるなど学習環境が整っている。

昨年度の生徒の実態や授業の課題としては、次のことがあげられる。

- ①グループやペア等の小集団の交流に比べ、全体の場での交流が盛り上がりがないこと
- ②考えの表現に消極的な生徒を、いかに学習活動に引き込んでいくかということ
- ③課題解決のための有効な協働学習のあり方を見極めること

2 実践

(1) 運用の方針

本校の学校教育目標「21世紀を主体的に生き抜く力を身につけた生徒の育成」を具現化するために、校訓【飛翔・友愛・探究】とめざす生徒像の関連については次のように捉えている。

飛翔：挑戦する力（主体的な学びの姿）

課題を自分ごととしてとらえ、解決に向けて粘り強く活動し続ける生徒

友愛：かかわる力（対話的な学びの姿）

他者との交流を通し、自分の考えを広げたり深めたりする生徒

探究：よりよく課題を解決する力（深い学びの姿）

既習事項を選択・活用し、納得のいくよりよい考えを導く生徒

学校経営の基本方針は、「授業で生徒を育て（授業によって、学力、人間性、心身の健康を育てる）、授業で教職員の資質・能力を伸ばし（授業づくりを通して、担任力を伸ばす）、授業で信頼を高める学校（授業で培われた子どもの姿によって、保護者や地域の方々からの信頼を高める）」である。学校教育の成果は、生徒の学びの姿そのものである。11月に行われた村山市教育委員会委嘱の公開研究発表会に向けて、探究型学習等による授業改善、学習法講座について主に取り組んできた。

(2) 具体的な取り組み事例

教育マイスターを中心に以下の取り組みを行い、学校全体で授業改善に取り組んだ。

- ① 研究主任との連携による探究型学習等の授業改善コーディネート
 - ・教科教室型運営部会のメンバーで、各教科教室や各階の学習センターを回り、机やホワイトボードの配置、活用方法の検討、掲示物の点検を行った。それにより、他の学年の生徒がその教室に入っても、学習の意欲も高まり、見通しを持って学習に取り組むことができるようになった。
 - ・同じ教科だけではなく、教科の枠を超えて授業について話し合うことができるよう、指導案検討会や事後検討会等の分科会メンバーを編成することにより、教科部会だけでは気づかない視点でも話し合うことができた。

- ・公開研究発表会で行う授業の主活動について検討会メンバーに公開（プレ授業研）し、本番の授業の吟味を通して、探究的な活動を深めることができた。
- ・めざす生徒像に対する生徒の実態を把握するために、生徒自身の授業への取り組みや普段受けている授業についてのアンケート調査を学期末に実施し、数値の要因と改善のための取り組みを模索・検討・実行した。日常の授業について振り返ることができ、授業の改善につながった。また、学芸委員会の活動と連携し、学習規律「学習のきまり」の呼びかけを行った結果、改善が見られた。

② 各学年での学習法講座を設定（朝の活動・週末集会・学活の時間）

- ・全校オリエンテーションで教科教室型の学習のきまりを確認したり、各学年の学習担当者による学習法講座（赤と緑の2色の下敷きを使った学習法、自学ノート書き方、自己テスト法など）を行ったりすることにより、学校全体で同一步調で指導することができた。

③ アクションプランの作成（本校独自の様式）

- ・全国学力学習状況調査の分析（各担当者による集計分析）や県学力等調査、NRT検査の結果を分析し、各教科に加え学活、道徳、総合的な学習の時間でも伸ばしたい資質・能力について話し合うことにより、どんなところに力を入れて指導していくかが明確になった。 **右上図**

学年	目標	達成状況
小学1年	基礎的な学習態度の確立	達成
小学2年	基礎的な学習態度の確立	達成
小学3年	基礎的な学習態度の確立	達成
小学4年	基礎的な学習態度の確立	達成
小学5年	基礎的な学習態度の確立	達成
小学6年	基礎的な学習態度の確立	達成

④ マイスター通信「まいすった一通信」の発行

- ・マイスター通信を発行し、校外の研修会等の内容や学習法（電子黒板や板書の利点、板書の仕方など）について職員に配付したことにより、授業の進め方について職員同士の会話が増えてきた。 **右中図**

まいすった一通信 第12号

秋田県の学力の躍進は実証された「共同研究」

学力アップの要因（秋田県立教育委員会）

- ① 学びの意欲を促す授業
- ② 学びの意欲を促す授業
- ③ 学びの意欲を促す授業
- ④ 学びの意欲を促す授業
- ⑤ 学びの意欲を促す授業
- ⑥ 学びの意欲を促す授業
- ⑦ 学びの意欲を促す授業
- ⑧ 学びの意欲を促す授業
- ⑨ 学びの意欲を促す授業
- ⑩ 学びの意欲を促す授業
- ⑪ 学びの意欲を促す授業
- ⑫ 学びの意欲を促す授業

共同研究は、授業の質を高めるための重要な取り組みです。...

⑤ 3年進路だより「おーるいんわん」の発行

- ・効果的な学習の方法や進路情報について取り上げ、生徒・保護者の進路意識や生徒の学習意欲の高揚を図ることができた。 **右下図**

おーるいんわん 第7号

姿勢と学力の関係は・・・

姿勢が悪いと学力が低下する。姿勢を正すと学力が向上する。...

姿勢を正すためのポイント

- ① 姿勢を正す
- ② 姿勢を正す
- ③ 姿勢を正す
- ④ 姿勢を正す
- ⑤ 姿勢を正す
- ⑥ 姿勢を正す
- ⑦ 姿勢を正す
- ⑧ 姿勢を正す
- ⑨ 姿勢を正す
- ⑩ 姿勢を正す
- ⑪ 姿勢を正す
- ⑫ 姿勢を正す

3 成果と課題

(1) 成果

アクションプランをもとにして学年で育成を目指す資質・能力を話し合い、それを意識して活動を仕組んだことにより、本校でめざす生徒像に近づいている。

(2) 課題

- ・キャリア教育を積極的に行い、自分の将来に対する具体的なイメージを持たせることによって、学習法講座などがさらに活きてくる。
- ・公開研究会までは校内の活動を中心に、3学期は校外での活動を中心に行っていく予定だったが、コロナウィルス感染防止の関係で大幅に教育課程が変更になった。そのため、年度の途中で小学校に訪問することができなかった。葉山中学区の小中9年間を見通した「葉山プラン」の実現のために、今後、小学校との連携を密にとり、小学校ではどんな授業をしているのかを把握し、中学校の学習にスムーズに移行できるようにしていかなければならない。

教育マイスター制度 中学校教育マイスター
数学を重視した学力向上のための授業改善の取組み
南陽市立沖郷中学校

1 本校の実態

本校は平成 22 年度に旧梨郷中学校と統合し、今年度で創立 10 周年を迎える。在籍生徒数は 233 名、普通学級 7 学級及び特別支援学級 4 学級の計 11 学級の中学校である。

本校は、集中して学習に取り組んだり、与えられた課題に一生懸命取り組んだりする生徒が多い。学んだ内容を知識として答えることはできるが、その知識や技能を生かして考える問題に対して答えられる生徒は少ない。

ここ数年の全国学力・学習状況調査の結果を見ても、本校の数学の平均は全国平均を下回っている。多くの生徒は、数学を学ぶことは大切であり、将来役に立つものと感じているが、実際に問題を解く中で、数ある解法の中から最も適したものを考えたり、説明問題や証明問題を最後まで書こうとしたりする生徒は少ない。他教科との関連も含め、数学における学力向上が課題であるため、昨年度と今年度の 2 年間、数学科の教員が教育マイスターを務め、本制度を活用して課題解決を図っている。

2 実践

(1) 運用の方針

- ・上記の課題解決に向けて、数学科の教員を教育マイスターとする。これまでの数学の各種テストを分析し、普段の授業や研究授業を通して授業改善に努め、数学における「確かな学力」を育成する。
- ・学校研究を通して校内 O J T を充実させ、学校全体の授業改善に対する意識をさらに高めていく。
- ・外部研修で学んだ内容を校内研修で報告し、共有化を図り、授業改善につなげていく。
- ・南陽市の重点教育の 1 つである小中一貫教育を推進するために、校区内の小学校と連携して、算数・数学の学力向上を目指す。

(2) 具体的な取組み事例

① 数学の学力向上に向けた実りのある研究授業の実施



本校は研究授業を年 2 回実施している。指導案検討時は 3 つの視点「課題設定」「学び合い」「振り返り(単元指導計画)」に沿って検討を行っている。

昨年度は数学の研究授業を 2 回行った。第 1 回では教育マイスターが授業を行い、第 2 回では教育マイスターと連携し、他の数学科の教員が授業を行った。助言者として早稲田大学の小林宏己教授を招聘し、指導・助言を頂いた。その内容は次の通りである。

- ・ねらいを明確にし、生徒がどのように変容したかを授業の中で捉える。全生徒を見取るのは難しいので、3 名の生徒を抽出し、変容をしっかりと見取る。
- ・生徒が主体的に学ぶために、分かる生徒は周りとはシェアし、分からない生徒は分かる生徒に声かけできるような学び合いの場を設定する。
- ・教師は生徒同士の関わりの中で、必要に応じて後押しをしていく。
- ・学びの振り返りを大切にし、生徒に言語化させることで資質や能力を育てる。

昨年度の研究の成果と課題を受けて、今年度は、コロナ禍においてどのように学び合いの場を設定し、生徒の協働的な学びを充実させ、学力向上につながるかということを中心の1つとして研究を進めた。ペアでの確認や短時間での教え合い、発言の機会を保障することによる意見共有など、普段の授業で継続して行い日常化を図っている。

② 校内OJTの充実



若手教員の授業づくりに積極的にに関わり、TT指導に加え、よりよい授業が行えるよう、授業の進め方を中心に指導・助言を行った。校内の初任者研修の一環として、道徳の授業づくりについてもアドバイスをを行うなど、初任者研修とタイアップしながらOJTを推進している。

教育マスターが定期的に授業参観できる校内体制を整備し、助言を行うことで職員の指導力向上を図っている。また、道徳授業研究会など職員のニーズに応じた校内研修をコーディネートし、職員の研鑽の場を創出することにも努めて取り組んでいる。

③ 外部研修の報告と実践

昨年度の滞在型研修で訪問した茨城県大洗町立南中学校、筑波大学附属中学校、県立東桜学館中学校の取組みから本校の実践に生かせる点を取り入れている。その中で、数学科ではTT指導を生かすために、授業初めの5分間でT2を中心とした計算演習を行い、生徒の基礎基本が確実に定着できるように努め成果を上げている。また「探究型学習」における総合的な学習の時間の重要性を再確認し、総合的な学習の時間の在り方について見直しを図っている。

④ 小中一貫教育を意識したマスター制度の活用

校区内の小学校とお互いに算数、数学の授業を参観し合い、それぞれの視点から意見を述べ、次の一手につなげた。また小学校の若手教員育成のために、中学校マスターが算数の授業を参観し、算数・数学における系統性や児童のつまづきに対する指導のポイントなど、専門的な立場でアドバイスをを行った。

3 成果と課題

(1) 成果

- ・数学の学力向上に向けて、昨年度から毎時間取り組んでいる5分間の計算演習を積み重ねた結果、3年生のテスト分析から平均点が上昇していることが分かった。数学の基本的な知識や技能について、学年全体を通してわかる・できる生徒が増えたことにつながったと思われる。今年度は理科においても同様の取り組みを行い、少しずつ力を伸ばしてきている。

(2) 課題

- ・全国学力・学習状況調査等の結果分析を丁寧に行い、基礎基本の定着に加え、「確かな学力」を身に付けるための授業づくりや指導法の改善に取り組んでいく。
- ・3つの視点を踏まえた教科の指導方法について、小中一貫教育の指導力向上の先導に努めていく。
- ・学習指導要領の改訂に伴い、評価の見直しと捉え方について、伝達講習の場を設ける。